

s i d e チェリー

「さあ！今宵も美女が勢揃い！！  
妖艶な歌と踊りにどうぞ酔いしれてください！  
カトレアナイトショー！！！」

その言葉と共に、私たち踊り子はステージに上がる。  
陽気だけど上品に、上品すぎず妖艶に。  
今日も楽しくて仕方がない、そんな笑顔を浮かべてステージで踊っていると 1 人の青年と目が合った。  
背が高く顔の整った黒髪の青年。  
その目は私を捉えて離さない。

どうやら今夜はラッキーらしい。  
私に魅了されてくれた青年が 1 人いるのだから。  
そうとなればやる事は一つ。  
その青年にウインクして、あんたと寝たくて堪らない、みたいな女を演じていればいいんだから。

向こうが乗り気なら私は今夜このステージの上階にある部屋で一夜を過ごす。

踊り子と言えどベッドの上でのお仕事も必要なのが現実だ。  
ただステージで踊っているだけでは客は付かない。  
本当、厳しい世界だ。  
こうでもしないと女 1 人では食べて行けないんだから。

ステージが終わり、裏に引っ込む踊り子、常連に媚を売りに行く踊り子、新しい客を取りに行く子、目当ての男を逃すまいと背後に回る私で各々が解散する。

私はこっそりとあの青年の背後に回り、大きな体軀にそっと腕を回したのだった。

「……。」

青年はあまり驚いていない、気配を消して後ろから抱きつかれたら普通は驚かない？  
私なら絶対に飛び上がると思うけど。  
驚いたところを揶揄うみたいにして親近感を持たせたかったけどこの作戦は失敗に終わっ

た。

だったらシンプルに口説いてみましょうか。

「こんばんは、お兄さん。」

大きな体軀から伝わる熱と鼓動、表情には出さなかったけど鼓動の速さからして全く驚かなかったわけではないらしい。

「こんばんは…踊り子さん。」

青年は私の手の甲を指先で少し撫でる。

「ふふっ、チェリーと呼んでください。」

名前を教えると青年は腕を上げて少し振り返り私の顔を見た。

「綺麗でした…チェリーさんが、一番。」

少し照れたように言った青年。

こんなに大きな体をしていて、顔もいいくせにその純粋な感じはどこから醸し出されるの??

この人、可愛い。

「上に行けばもっといろいろ見せてあげるけど…?」

甘えるように頭を預け青年の太ももを撫でると一瞬ピクッと反応した。

よし、これは釣れるわ。

そう確信した瞬間、青年の正面へ回り大きな手を引いて二階へ駆け上がった。

二階へ上がり、個室に鍵をかけてすぐに彼の首に手を回す。

身長差が結構あるから私も背伸びをしつつ彼の首元を引き寄せてキスをした。

「ンッ。」

「ッ////////」

可愛い反応、絶対女慣れしてない。

その唇を溶かすように舐めれば彼の唇がほんの少しだけ緩む、その隙をちゃんと狙って深いキスへと持ち込んだ。

このキスでどの男も魅了してきた。

ここのお姉様方から教えてもらった、奥義といっても過言ではない。

彼の体から力が抜けてきたら一度キスをやめてベッドへ誘導する。

優しく彼を押し倒しベッドに寝かせ、私が衣装を脱げばそれなりの反応があった。

キツそうだから脱がせてあげよう。

「ふふっ♡」

怖がらせないように少し笑みを見せて彼のズボンのベルトを外し大きくなったそれを露わにした。

私はその大きさに表情を崩さず絶句する。

無理無理無理、絶対入らないって。

心の中で大パニックになっているとは知らず彼はそんな私をひたすら見つめている。

うっとりしているような、見惚れているような、そんな表情で。

上の服も優しく脱がせて、ベッドの近くに置いてある棚から潤滑剤を手に取りかなり大量に彼のソレに垂らした。

これだけ塗っておけば大丈夫でしょう、私の大事な所が裂けて死ぬ事はないはず、きっとどうにかなるはず。

むしろどうにかなってお願い。

そんな儂い願いを込めて彼の上に跨った。

大丈夫、何度も体を開いてきたから今更痛いなんて事はない。

意を決して凶器とも言えるそれにゆっくりと腰を落とす。

「んあっ♡あっ////////あっあ////////ああっ…////////」

今まで感じた事のない質量に自然と声が漏れてしまった。

「っ…うっ…っ…くっ……////////」

ステージで踊った後はこの彼の上で踊っている。

彼は見た目の割に遊び慣れていないようで主導権を握るのは本当に簡単な事だった。

「チェリー、さんっ…ちょっ…////////」

大きな手で私の腰を控えめに掴む彼は快感に顔を歪めた。

「チェリーさっ…ん…待って、本当に」

「きゃっ////////」

主導権を握っていたはずが油断したせいか簡単にひっくり返されてしまった。

「そんな焦らされたら…堪らなくなる…////////」

ん？焦らす？私焦らしてないよ？結構本気で誘惑してたよ？

「あの…お兄さん、私」「アランです。」

それはつまり名前を呼べと言う事だろうか。

「アランさん、私、っ////////////////////♡」

言葉を遮るようにこの青年は私の最奥を押し潰した。

その快感に声も出ず息を止めてしまう。

「呼び捨てにしてください、その方が嬉しい…。」

私の中に規格外のモノを挿れておいてそんな純粋な事言うの？

そんなの狡くない??

「アラン////////」

「ああ…可愛い声…////////」

アランは心底嬉しそうに目元を緩ませて腰を優しく動かした。